OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 「香港中文大学文物館蔵簡牘」実見調査報告 |
| Author(s) | 草野, 友子 |
| Citation | 中国研究集刊. 2013, 57, p. 170-177 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/58677 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　巨号（総五十七号）平成二十五年十二月　一七〇―一七七頁

# 「香港中文大学文物館蔵簡牘」実見調査報告

草野友子

## 一、香港中文大学訪問の経緯

二〇一二年十二月、東アジア文化交渉学会第五回大会開催（五月十日・十一日、会場は香港城市大学）の案内があり、二月下旬に湯浅邦弘教授（大阪大学）・竹田健二教授（島根大学）・金城未来氏（当時大阪大学大学院博士後期課程院生、現在大阪大学助教）・草野友子（日本学術振興会特別研究員ＰＤ）の四名が「中国新出簡牘研究」というパネルを設定して正式エントリーをした。その際、可能ならばこの機会に「香港中文大学文物館蔵簡牘」に関する情報を収集できないかとの意見が出た。なぜなら、「香港中文大学文物館蔵簡牘」の中には戦国楚簡が含まれており、「上海博物館蔵戦国楚竹書」（以下、上博楚簡）の所収文献の一部ではないかと見られているものもあるからである（詳細は後述）。

そこで、湯浅教授がかねてから親交のあった鄭吉雄教授（元台湾大学教授、現在香港教育学院教授）に対し、三月十五日にメールで連絡をし、この簡牘に関して何か情報がないかとお尋ねしたところ、鄭教授はただちに香港中文大学歴史研究中心主任の黎明釗教授と恒生管理学院の張光裕教授に連絡を取ってくださり、学会前日の五月九日に簡牘を参観させていただく運びとなった。また、湯浅教授に対し、同大学での講演の依頼があった。これにより、参加メンバーは渡航日程を一日繰り上げ、五月八日に香港入りすることにした。

四月上旬、香港中文大学より正式な招待状がメールおよび国際郵便で届く。

五月八日、湯浅教授・金城助教・草野と通訳の白雨田氏（四天王寺大学非常勤講師）の四名が関西空港から香港に、また、当時台湾大学の訪問学者として台北に在住していた竹田教授が台湾から香港に渡航し、空港で合流した。

五月九日、午前八時四十五分、黎明釗教授が我々の宿泊先に車で迎えに来て下さり、香港中文大学に向かう。そして、午前九時三十分～十時四十五分、中国文化研究所の一室にて「香港中文大学文物館蔵簡牘」の実見調査を行った。

## 二、「香港中文大学文物館蔵簡牘」概要

ここで、「香港中文大学文物館蔵簡牘」の概要を確認しておこう。「香港中文大学文物館蔵簡牘」とは、香港中文大学文物館が数年かけて購入・収蔵した二百五十九枚の簡牘を指す。そのうち、戦国楚簡が十枚、西漢の『日書』簡が百九枚、遣策が十一枚、奴婢廩食粟出入簿簡牘が六十九枚、「河隄」簡が二十六枚、東漢の「序寧」簡が十四枚、東晋の「松人」解除木牘が一枚。そのほか、残片八枚と、文字が書写されていない空白簡十一枚がある。これらの簡牘は、二〇〇一年に『香港中文大学文物館蔵簡牘』（陳松長編著、香港中文大学文物館）として、写真図版（カラー）と釈文・注釈が公開された。文字が判読しづらい簡牘については、カラー写真の横に赤外線カメラで撮影された写真も付されている。以下、本書に基づいて各簡牘の内容を概説する。

甲：戦国楚簡

全十枚。すべて残簡であり、それぞれが接続するわけではない。最も長いものでも十二字程度しか残っていないが、そのほとんどが文献類の楚簡である。『香港中文大学文物館蔵簡牘』において、この戦国楚簡は上博楚簡と関連が深く、うち二枚が「緇衣」と「周易」に属するものであることが述べられている。その後、上博楚簡の公開が進み、『上海博物館蔵戦国楚竹書』（馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇一年十一月～。二〇一三年九月時点で第九分冊まで刊行）の各分冊において、「香港中文大学文物館蔵簡牘」の戦国楚簡のうち四枚は、上博楚簡『緇衣』・『周易』・『子羔』・『三徳』の一部であるとみなされている。

乙：漢代簡牘

1．日書

全百九枚。簡牘の中で最も数量が多い。その内容は、睡虎地秦簡『日書』や随州孔家坡漢簡『日書』と対応するところが多い。『香港中文大学文物館蔵簡牘』においては、初歩的な比較を経て、帰行・陥日・取妻出女・禹須臾・稷辰・玄戈・吏篇・日夜表・干支表等の二十四の篇章に分けている。本簡には「孝恵三年」という紀年が見えるため、「孝恵三年」（前一九二年）の後に書写されたものであることがわかっている。本簡のうち一簡は、秦の始皇帝の諱「政」を避け、「正」の字をすべて「端」の字に改めている一方、簡文の中では漢の高祖劉邦の諱「邦」を避けていないため、漢初の避諱の現象について考える際の資料にもなる。

2．遣策

全十一枚。副葬品のリスト。

3．奴婢廩食粟出入簿簡牘

全六十九枚。本簡の中に「元鳳二年」（前七九年）という紀年が見えることから、前漢中期の簡牘であることがわかる。本簡は、「壽」「根」「貝」といった人物が召使に穀物を支給した状況や、召使が毎月粟をどれくらい食べたか等について詳細に記録している。また、大石・小石（容量の単位）の換算率が詳しく記録されており、大石と小石の関係を理解するための手がかりとなる。

4．河隄簡

全二十六枚。「河隄」の地理的位置については明らかではないが、堤防の広さや長さについて記載されている。また、「積」「畸」「實」といった専門の算術用語が見え、『九章算術』と対照して検討することができる。

**5. 序寧簡**

全十四枚。形制の面では二種類に分けられる。一つは、やや小さめの木片に書写され、字体は比較的小さくて謹直である。もう一つは、長めの木簡に書写され、字体は比較的大きくて奔放である。中には弓のように曲がった形状のものもある。紀年があり、後漢の章帝建初四年（七十九年）のものであることがわかっている。「序寧」とは「予寧」（漢代の服喪の専門用語）であると見られている。簡文中には「皇母」「皇男皇婦」「皇子」「皇弟」といった語が見えることが特徴的である。

**丙：晋代「松人」解除木牘**

全一枚。東晋時代の「松人」の解除（魔除けをして災いを除く）の木牘であり、人物の絵が描かれ、その周りや裏面に解除文が記載されている。また、木牘の側面にも文字が記されている。後漢以後に流行した鎮墓文を理解するのに重要な資料を提供している。

## 三、実見調査

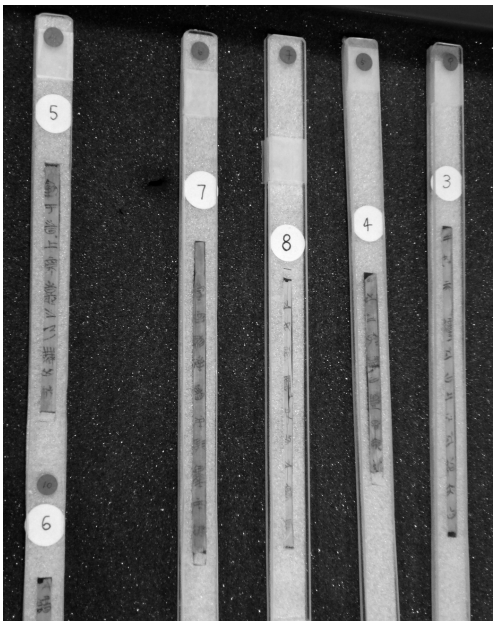
今回実見した簡牘は、計八十二枚。全体の約三分の一の分量に当たる。内訳は、以下の通りである（算用数字の番号は、『香港中文大学文物館蔵簡牘』と対応）。

・戦国楚簡、十枚。1～10
・漢代簡牘
遣策、十一枚。120～130
奴婢廩食粟出入簿簡牘、三十一枚。
131～137、138～147、148～161

河隄簡、十五枚。200～214
序寧簡、十四枚。226～230、231～239
・晋代「松人」解除木牘、一枚。240

香港中文大学文物館の方の説明によると、これらの簡牘は、一九八〇年代末から九〇年代にかけて、香港の骨董屋から少しずつ購入し、収蔵されたとのことである。

購入時は、脱水されていない泥の塊の状態であったため、一九九五年当時、湖北省博物館の脱水処理の専門家であった陳中行氏を香港に呼び、脱水作業が行われた。脱水前には赤外線撮影が行われており、『香港中文大学文物館蔵簡牘』の中で文字が不鮮明な簡牘については、その赤外線の写真も掲載されている。




一九九九年には、湖南省博物館副館長（当時）の陳松長氏が半年ほど香港に滞在し、簡牘の分類整理を行った。

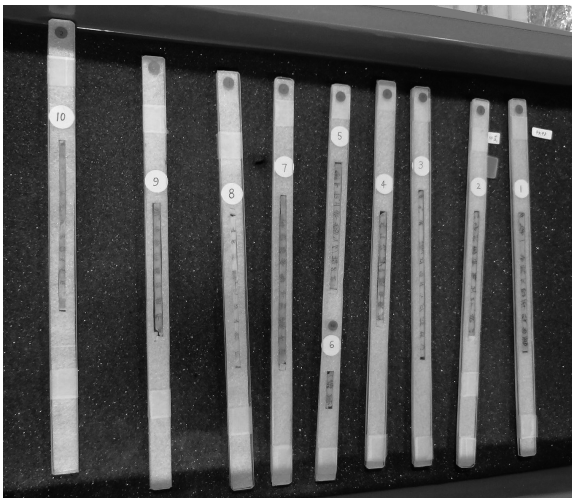
今回実見した戦国楚簡と遣策の全簡および河隄簡の一簡分は、一枚ずつガラスケースに挟まれており、そのほかの簡牘はガラスケースなどには挟まれておらず、そのままの状態であった。

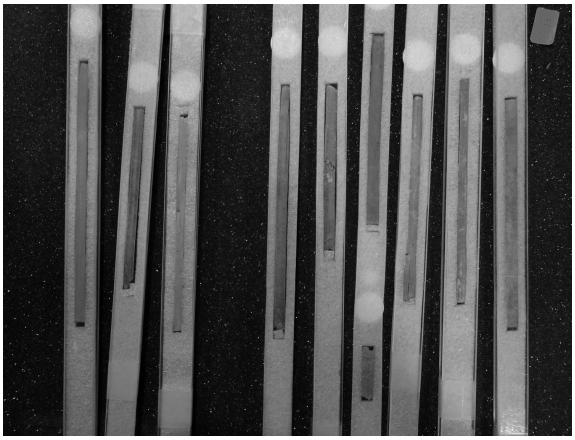
上の写真のように、円形のシールに番号が書かれており、白いシールの番号は収蔵時に便宜上付けられたもの、色つきのシール（青・緑・黄色など）の番号は整理後に付け直されたものであり、後者は『香港中文大学文物館蔵簡牘』の番号と対応している。

戦国楚簡は十枚すべてが残簡であるが、公開当初から上博楚簡と関連が深いことが指摘されていた。特に、以下の四枚は、上博楚簡所収文献の一部であることが、上博楚簡の各分冊において述べられている。

・第一簡と上博楚簡『緇衣』（第一分冊）
・第二簡と上博楚簡『周易』（第三分冊）
・第三簡と上博楚簡『子羔』（第二分冊）
・第四簡と上博楚簡『三徳』（第五分冊）

また、近年発表された論文、李松儒「香港中文大学蔵三枚戦国簡的帰属」（張徳芳主編『甘粛省第二届簡牘学国際学術研討会論文集』、上海世紀出版・上海古籍出版社、二〇一二年十二月、五九九～六〇一頁）において、第五簡・第六簡・第八簡は、上博楚簡『季庚子問於孔子』（第五分冊）に属するのではないかとの指摘がなされている。そこで、簡牘参観中に湯浅教授が李松儒氏の論文のコピーを提示し、意見を求めたところ、黎明釗教授はじめ関係者各位は、まだこの論文の存在を知らなかったとのことで、コメントはいただけなかった。





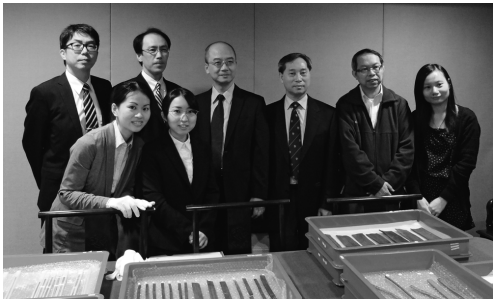
上博楚簡は、竹簡の背面の写真は、文字が書写されているもの以外、公開されていない。以前、上博楚簡の実見調査を行った際には、竹簡の背面は文字が書写されている部分しか見ることができなかった。（詳細は、中国出土文献研究会「中国新出簡牘學術調査報告―上海・武漢・長沙―」（『中国研究集刊』第五十五号、二〇一二年十二月）参照。）

一方、今回の実見調査においては、戦国楚簡の背面も見ることができた。近年、竹簡の背面にある墨線や劃痕（ひっかき傷状の斜線）が竹簡の排列の手がかりになる可能性があるために注目を集めているが、これらの戦国楚簡の背面には、そうしたものは確認できなかった。

上博楚簡は公開途中であり、まだ全体を見渡すことができない。そのため、上博楚簡が全て公開された段階で今一度総括し、「香港中文大学文物館蔵簡牘」の戦国楚簡を上博楚簡の一部とみなして良いかどうかという点も含めて、再検討する必要があろう。

漢代簡牘については、もともと西北の甘粛省のあたりで出土したのものではないかとの推測がなされているそうであるが、詳細は不明とのことである。遣策は、編縄痕がはっきりと残っているのが特徴的であった。奴婢廩食粟出入簿簡牘148は、契口が四つ見られる珍しい例であった。

参観中、写真撮影をしても良いかどうかをお尋ねしたところ、すでに公開されている簡牘であるため、問題ないとのことであった。また、手袋を付けた上で、簡牘を実際に手に取って見ても良いとのことで、簡牘一つ一つをじっくり見ることができた。



簡牘参観終了後は、馮景禧楼一〇一室に移動し、十一時から十二時二十分まで湯浅教授による講演が行われた。講演タイトルは「上博楚簡〈舉治王天下〉的古聖王傳承」、司会は張光裕教授、通訳は白雨田氏、参加者は二十名。講演後は活発な討論が行われた。

最後に、鄭吉雄教授、黎明釗教授、張光裕教授をはじめとする関係者各位のご高配とご教示に対し、心より感謝申し上げたい。

【附記】

本稿は、平成二十五年度日本学術振興会・科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。